序

松本三郎先生は、一九六一年四月に法学部副手に就任されて以来、三二年にわたり東南アジアの国際政治の研究と教育に従事され、一九九三年九月をもって退職された。

松本三郎先生は、極めて多忙な生活にもかかわらず、広い学問的関心を持ち、多くの著作を発表された。それらのなかでもっとも代表的な著作は、博士論文として提出され、後に刊行された『中国外交と東南アジア』である。アジア研究者が中国と東南アジアの専門家に別れていくなかで、本書は両方の地域に対する深い洞察と体系的知識に基づいて書かれたものであり、今日においてもその学問的生命を保っている。そこには、国際政治学と地域研究の方法が取り入れられている。中国の外交政策そのもの、中国、アメリカ、ソ連などの域外大国と東南アジア諸国との関係、アジアにおける歴史的遺産としての国境問題などが主要な分析対象となっている。また、ラオス、ビルマ、ヒマラヤ三国などアジアの中小国を取り上げ、それぞれの国の歴史的背景、文化、政治社会構造を丹念に分析し、これら諸国が大国の思惑にだけ翻弄されていないことを明らかにした点においても、この著作は高く評価されるのである。

松本三郎先生の東南アジア研究のいま一つの領域は、第三世界諸国の比較政治である。東南アジアおよび南アジア諸国の近代化、軍部と政治、ナショナリズム、民族関係、強権政治などを比較政治的観点から論じた論稿が多くみられる。このような研究の延長線上において、同氏は近年北朝鮮やヴェトナムの社会主義体制の分析にまで踏み込んでいる。

戦後東南アジアで各種地域機構が設立されては失敗に終っていったなかで、松本先生は一九六八年の設立当初から

ＡＳＥＡＮの重要性に注目し、一貫してその統合と地域主義の過程を追求されてきた。同氏は、この面での先駆者であるとともに、今日においても指導的地位にある。なお、これ以外にも松本先生には、国連における第三世界、日本、中国の投票行動を計量分析的手法によって分析した業績がある。

松本三郎先生の学会における活動にも目ざましいものがある。特に、長年にわたり日本国際政治学会およびアジア政経学会の理事を務められ、両学会において理事長として日本の国際政治学とアジア研究を指導された。また同氏は、第一四期日本学術会議会員をも務められた。

以上の研究と学界における活動に加えて、松本先生の慶應義塾の行政に対する貢献にははなはだ大きいものがある。長年にわたり大学学生部長、志木高等学校校長を務められた。特に、石川忠雄前塾長の下で一二年にわたり常任理事として慶應義塾の発展に努められた功績は大きく、そのような献身とご苦労に対し敬意と謝意を表する次第である。先生は学内における公務との関連で、学外における文部省および私立大学関係の仕事にも従事されている。このように公務に忙しい松本先生ではあったが、かつてフレッチャー国際関係大学、在香港日本国総領事館、マレーシアに留学されたことは、先生の学識を深めるうえで役立ったとともに、楽しい想い出として先生の心に残っていることであろう。

同じアジア研究者として松本先生に個人的に接した想い出は尽きない。同氏がアジア政経学会理事長であったとき、私は総務担当理事として補佐したことがある。その時、学術研究の正しい在り方を踏まえてどのように学会を運営するかを、私は松本先生から多く学んだ。この経験は、後に私が同じ地位についたとき大いに役立った。

松本三郎先生は学界の第一線にある四〇歳代末にで常任理事に就任された。それ以後も先生は精力的に学界活動を続けられたが、大学の公務のために十分に研究に時間を費やすことのできないことを無念に思っておられるのではないかと、私は内心同情の気持ちを持っていた。しかし、常任理事を退任された後の慰労の宴で先生が「この一二年間

は意味があり、あれで良かったのです」という趣旨の挨拶をされたとき、私はほっとするとともに、その清々しい生きざまに大きな感激を覚えたことは、今でも深い印象として私の心のなかに残っている。

ここまで私は松本先生と書いてきたが、これまで一度もそのように呼んだことはない。同氏は政治学科のアジア研究においてもっとも親しく、敬愛する先輩であり、私にとっては「松本さん」である。同氏は現在防衛大学校長の重責を担っておられ、また本塾客員教授として学生の指導にもあたっていただいている。松本さん、今後ともお元気で活躍されることを願っています。

一九九五年一一月

法学部長　山田辰雄